

韓国の育児支援と乳幼児教育、子どもたちの今

イ・ユンジュ（韓国）

毎年梅雨の時期が近づくと、15年前、ひよっこの新米ママだったころの映像をありありと思い出します。結婚と同時に当時勤めていた幼稚園を辞めた私は、夫が会社に行くと、まだ5カ月だった娘と二人、雨が降り続く地方都市の新興アパートの一室で過ごしていました。娘がしばし寝息を立ててくれると、なかなか乾かない布オムツにアイロンを当て、丁寧にかごに積みあげていきました。

初めての子育てには楽しみもあり、気負いもありました。アパートの近くでポン菓子の行商が「ポン！」という大きな音を立ててせんべいを焼く音にも、娘が泣き出すのではないかと走り寄って苦情を言ったこともあります。どこか神経が張り詰めていた私を支えてくれたのは、友人たちとの集まりでした。子どもや夫について話したり、それぞれの家を回ってささやかな食事会もしました。韓国では結婚後も実家や嫁ぎ先からキムチやおかずを送ってくるため、友人が数人集まれば、かなり多彩な地方の料理が並んだものです。

韓国では子育て中の母親が集まり、子どもと一緒に遊べるような公共施設は、現在に至っても充実していません。かつて私が経験したような横のつながりが薄れた若い世代の母親たちは、さらに孤立しがちなようです。

育児支援といえば、幼稚園（教育部管轄、教育目的）か保育園（保健福祉部管轄、保育目的）、またはアパートの一室を開放するなどした「オリニチブ（子どもの家）」と呼ばれる小規模で家庭的な保育施設に通わせることになります。施設数が多いため、親は自分たちの教育方針に合った施設を選択することができます。半面、私立幼稚園などは差異化を図るため、英才教育やバレエ教室、外国人英語教師の英語クラスなどを開講して付加価値をつけ、費用は当然上がりますが、その教育内容を選好する親たちが殺到し、園によっては待機児童が生じることもあります。

今年4月からは法改正により、従来は低所得者層や地方の子どもに限られていた保育料補助が拡大し、就学前の子どもを持つ全ての世帯を対象に事実上、無償化されました。幼稚園（特別講座の費用などは除く基本料金）や保育園に直接政府が支払う仕組みです。3カ月たった今、特に都市部では政府の予想以上に入園希望者が多く、予算を大幅に超え、負担を地方自治体と折半し始めた都市もあるなど先行きは不透明です。それでも、母親たちは仕事やリフレッシュへと自分の時間を持つ余裕が生まれました。

こうした施策の恩恵の一方で、時代の波とあいまって、親子のふれあいや家庭教育がおろそかになってきたという声も出ています。

私は主婦生活を経て、4年前に大学に社会人入学した後、昨年からは幼稚園の現場に復帰し講師として働き始めました。子どもや親の環境は、あの15年前から大きく変化しているのを実感します。

韓国の西南、全羅南道木浦市の郊外にある幼稚園ですが、子どもたちは急速に進むデジタ

ル化の渦中で育っています。家庭では絵本でなく、スマートフォンで子供向け動画を見て踊りをおどり、歌を歌います。親は子どもの成長を動画撮影し、友人や家族で交換するほか、子どもと一緒に再生して楽しんでいます。幼稚園で絵本を手にしたある園児は、ページの上を指で水平になぞる、あのスマートフォン操作の仕草をしていたのには、正直とまどいを覚えました。



子どもの家

一方、母親たちは地域のコミュニティーより、同じ幼稚園の親同士でつながるようになっていきます。

高学歴が将来の安定した生活を保障すると考えられている（実際、セーフティネットの不十分な社会状況では安定した職を得ることは切実な問題と言える）、韓国の教育熱は乳幼児にも注がれ、保育より教育を目的とする親たちはより高い水準の教育を志向します。特色がある幼稚園ほど、同じ教育内容に賛同する親たちはより強い結びつきを作ります。親や子どもは、幼少期からすでに階層化していく一面もあるのです。

今後は枠の保障にとどまらず、現状に対するより深い考察と、柔軟な施策や地域ネットワーク作りの支援を軸にした育児支援への論議が必要ではないでしょうか。

そんなことを考えながら、一人の母親として、保育士として、歩んできた道を振り返り、子どもたちの今を見つめています。